

北氷洋の氷の割れる音

寺田寅彦

青空文庫

一九三二年の夏の間に、シベリアの北の氷海を一艘そうのあまり大きくない汽船が一隊の科学者の探險隊を載せて、時々行く手をふさぐ氷盤を押し割りながら東へ東へと航海していた。しかしその氷の割れる音は科学を尊重するはずの日本へ少しも聞こえなかった。満まん州しゅう問題、五・一五事件、バラバラ・ミステリーなどの騒然たる雑音はわれわれの耳を聾ろうしていたのである。ところが十一月になってスクリューを失った一艘の薄ぎたない船が漁船に引かれて横浜よこはまへ入港した。船の名はシベリアコフ号、これがソビエト政府の北氷洋学術研究所所属の科学者数名を載せて北氷洋をひと夏に乗り切ったものであるということが新聞で報ぜられた。それでもわれわれはまだかの有名なバラバラ事件の解決以上の興味が刺激されることもなくて実にのんきにぼんやりしていたのである。

O氏の主催で工業クラブに開かれた茶の会で探險隊員に紹介されてはじめて自分のぼんやりした頭の頂上へソビエト国の科学的活動に関する第一印象の釘くぎを打ち込まれたわけである。

隊長シュミット氏は一行中で最も偉大なる体軀たいくの持ち主であって、こういう黒髪黒髯こくぜんの人には珍しい碧眼へきがんに深海の色をたたえていた。学術部長のウィーゼ博士は物静かで真

摯^{んし}ないかにも北歐人らしい好紳士で流^{りゅう}暢^{うちよう}なドイツ語を話した。この人からいろいろ學術上の仕事の話を聞いた後に「日光^{にっこう}は見たか」と聞いたら「否」、「芝居は」と聞いたら「否」と答えたきりで黙ってしまった。海流の研究の結果から氷洋の中に未見の島の存在を予報したこの人には「日光」や「カブキ」は問題にならなかった。地球磁力や氣象の觀測を受け持つて来たただ一人の婦人部員某夫人は、男のように短く切りつめた斷髮で、青い着物を着ていた。どこか小鳥のような感じのする人で伝語のほかは話さなかったようである。そのほかの若い生物学者や地質学者やみななまじめで上品で氣持ちのいい人たちであつた。日本のマルキシストなどとはだいぶちがった感じのする人たちであつた。映画監督のシュネイデロフ氏はだれも格好な話し相手がなくて、すみのほうの椅子^{いす}に押し黙つて所在なさそうに見えた。日本の学者たちの、この人にはおそくはなはだ珍しかったであろうと思われる風貌^{ふうぼう}を彼一流のシネマの目で觀察していたことであろう。

その翌日また別の席でこれらの人たちと晚餐^{ばんさん}を共にしてシュミット、ウィーゼ両氏の簡単な講演を聞く機会を得た。

北極をめぐる諸科学国が互いに協力して同時に氣象學的ならびに一般地球物理學的の觀測を行なういわゆるインターナショナル・ポーラー・イヤーに際会してソビエト政府は都

合八組の観測隊を北氷洋に派遣した。その中の数隊は極北の島々にそれぞれの観測所を設けて地磁気や気象の観測をしたり、あるいは火薬の爆発によって人工地震波を作りそれを地震計で観測した結果から氷盤の厚さを測定したり、あるいはまた近ごろ学界の問題になっている コスミックレー 宇宙線 に連関して空気の電離状態を研究したりすることになっている。またチエリユスキン岬とレナ河口にも観測所を設け、後者の一部は永久的のものにする。一方ではレニングラードからランゲル島へかけベーリング海近くまでも飛行機を飛ばし空中写真測量で北シベリアといったの地図を作る事になっている。なおそのほかに探險船シビリアコフ号をぎんてう艦装して途中でいろいろの観測研究をすると同時にただひと夏に北氷洋を乗り切るといふ最初のレコードを作ろうという計画を立て、それが立派に成功したのである。この船の航海中に遭遇したいろいろな困難のエピソードについてはすでに新聞雑誌にかなり詳しく紹介されたからここに繰り返すまでもない。しかしこの成功が決して偶然のぎよう倖こう倖によるものではなくてちゃんとした科学的な基礎の上に立つものであるということを知る人が少ないようである。ウィーゼ氏の話によると数年来かの国の気象学者たちは、気圧その他の気象学的要素の配置から夏期における北氷洋上の氷の分布状況を予報すること进行研究し、それがだいぶうまく的中するようになった。そのおかげで今度の航海がたいへ

んに樂であつたというのである。ことしの大規模の観測所増設によって、今後北氷洋の状況がますます明らかになればなるほど今後の航海はますます樂になるわけであろう。

この航海のおもなる使命は純學術的よりはむしろより多く經濟的なものであつて、それも単にロシアの氷海を太平洋に連絡させるというのみでなく、莫^{ばくだい}大な富源の宝庫ヤクツクの関門と見るべきレナ河口と、ドヴィナ灣との間に安全な定期航路を設定しようというのだそうである。

映画「トルクシブ」を見たときに、スクリーンに現われた地図の上を一本の光の線で示された鉄路の触手がにょろにょろと南に延びて行つてヒマラヤの北に近づくを見た。今度の探險隊員の講演の際壁にかけられた粗末な北氷洋の海図の上を赤い線で示された航路の触手がするすると東に延びて、それがベーリング海峡を越えて横浜まで届くのを見た。さて、この次の三本目の触手はどこへ向かつて延びるかが氣になる。

一九〇九年の夏帝都セントピーターズバーグを見物した時には大学の理科の先生たちはたいてい休暇でどこかへ旅行していて留守であつた。氣象台の測器検定室の一隅^{いちぐう}には聖母像を祭つてあつて、それにあかあかとお燈明が上がつていた。イサーク寺では僧正の法^ほ衣^{うえ}の裾^{すそ}に接吻^{せつぶん}する善男善女の群れを見、十字架上の耶蘇^{やそ}の寢像のガラスぶたには多くの

くちびるのあとが歴然と印録されていた。

通例日本の学者の目に触れるロシアの学者の仕事は、たいてい、ドイツあたりの學術雑誌を通して間接に見るだけであるが、科学の国としてのロシアの独立なる存在は、かの国の国是の変わった今日でもなおわれわれの目にはあまり濃厚な影を宿さなかったのであるが、今回の突然なシベリアコフ号の太平洋出現は真に閃電せんでんのごとく日本の学界の上に強い印象の光を投げたであろうと思われる。

ソビエト政府はこれらの學術的探險のために五百五十万ルーブリを投じたそうである。東洋の學術国日本の政府が學術のために現にどれだけの金を出しているかが知りたいものである。

新聞で見るとソビエトの五か年計画の一つとしてハバロフスクに百三十キロの大放送局を建設し、イルクーツク以東に二十キロ以上の放送局を五十か所作るということである。これが実現した暁には北西の空からあらゆる波長の電磁波の怒濤どとうが澎湃ほうはいとしてわが国土に襲来するであろう。

思想などというものは物質的には夢のようなものである。半世紀たたないうちに消えてしまわなければ変化してしまう。日本には昔からずいぶんいろいろな危険思想が海外から

幾度となく輸入されたが、それが抑圧に抗しながらやつと土着するところにはいつのまにかすっかり消化され日本化されてしまつて結局はみんな大日本を肥やす肥料になつていた。

しかし科学的物質的の侵略の波は決して夢のようなものではない。これにはやはり科学的物質的の対策を要する。将来の外交はもはやジュネヴで演説をしたり、たんかを切つてうれしがるだけではすまなくなるであろう。北氷洋に中央アジアに、また太平洋に成層圏に科学的触手を延ばして一方では世界人類の福利のために貢献すると同時に、他方ではまた他の科学国と対等の力をもつて科学的な競技場上に相角^{あいかく}逐しなればおそらく一国の存在を確保することは不可能になるであろうと思われる。まさにこの意味においても日本が今「非常時」に際会していることを政府も国民も考えてもらいたいものである。

北氷洋の氷の割れる音は近づく運命の秋を警告する桐^{きり}の一葉の軒を打つ音のようにも思われるのである。

（昭和八年一月、鉄塔）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第四巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北氷洋の氷の割れる音

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>